



富田学長は、開会のあいさつで、元国連職員として、発表者のアイデアやさらなる行動への新たな取り組みは、とても誇らしく、ワクワクするものだと思いを語りました。今回のコンテストを通して、グローバルな視野を持った生徒同士が影響し合い、ともに次の一步を踏み出してくれることを期待していると発表者にエールを送りました。



司会を務めたのは常磐大学人総合政策学部総合政策学科 2 年の村岡秀敏さん(左)、人間科学部心理学科 1 年の佐々木和也さん(右)。終始、落ち着いて、発表者に安心感を与えつつ、スムーズな進行役を果たしました。

稲田 宗一郎さん (青丘学院つくば中学校・高等学校 2 年)
“Solving World Hunger Problem Should Start from Japan”



飢餓問題は日本がまず最初に解決すべき問題と考え、食料自給率の向上について語ってくれました。私たち個人ができることとして、国産商品の購入や買った食料をすべて消費することを提案しました。

紀井 晴道さん (茨城県立勝田中等教育学校 4 年)
“Education for All”

2 位



常総市の夜間学級には多くの外国人が通い、ひたちなか市では外国人対象の日本語教室が開かれています。茨城県には 8 万 6 千人もの外国人が居住しており、彼らが快適に暮らせるよう、日本語習得を含めた教育環境を整えていくべきだと考えを語りました。

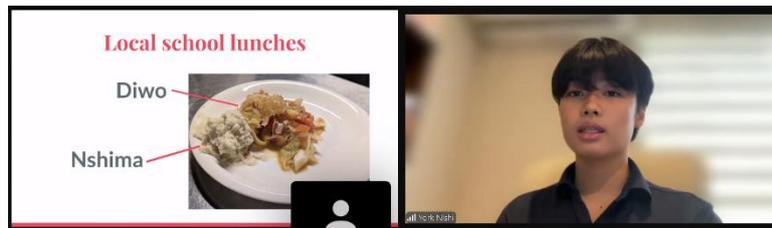
水谷 玲翔さん (茨城県立下妻第一高等学校 1 年)
“My plan to Achieve SDG 11”

西 遙空さん (朋優学院高等学校 2 年)
“Equal Education for All: A Vision for 2050”

3 位



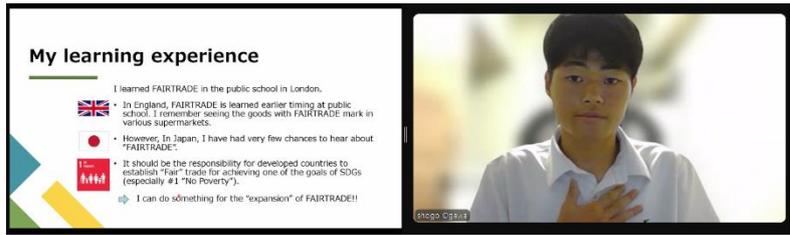
自らが居住する桜川市の人口減少問題に目を向け、外国人を招致し、住居の提供や祭りの参加を促すことで、空き家問題の解決や文化の継承につながるのではと、持続可能なまちづくりへの一歩となる提案しました。



質の高い教育こそ個人、社会、国家にとって極めて重要だと考え、マラウイのフェアトレード商品を販売するボランティア活動に参加した西さん。大学に進学した際には、経営学を学び、企業と協力して、平等な教育の質が世界に担保できるようにしたいと、夢を語りました。

小川 翔護さん (海城中学高等学校 4年)
“FAIRTRADE in Japan”

1位



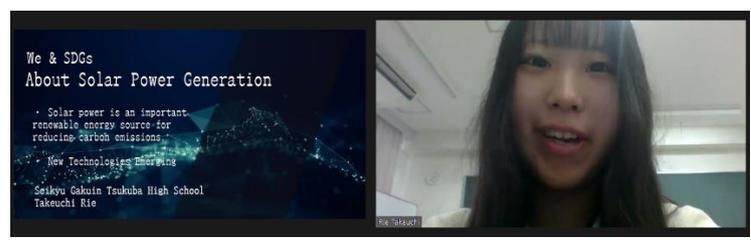
イギリスで幼いころ目にした FAIRTRADE マークが目に焼き付いていて、日本でその商品が実際に店頭で売られているか自ら調査したり、商品のプロモーション活動に参加したりすることで、より効果的に売り手を引き付けることが必要と結論づけました。

岡本 真歩さん (常磐大学高等学校 3年)
“Breaking Stereotypes”



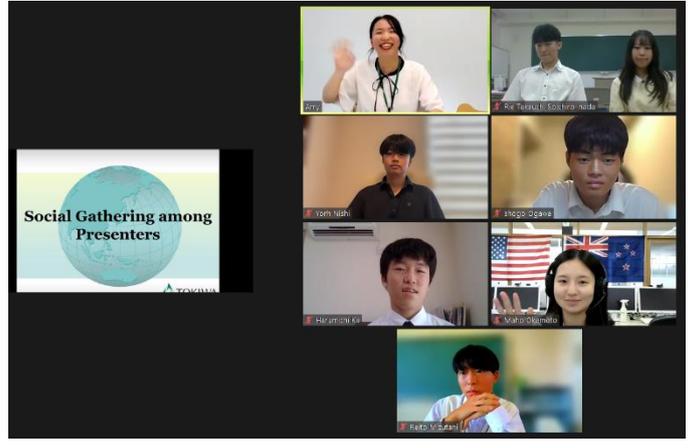
カナダ留学で、自らが「少数派」となる体験を経て、ジェンダーの固定観念が、男女平等の概念を妨げる原因の一つだと考えを披露しました。固定観念を卵の殻にたとえ、本質的なものが見えるよう、自らその殻を割ることが必要だとまとめました。

竹内 理恵さん (青丘学院つくば中学校・高等学校 2年)
“An Ideal Way of Solar Power Generation”



太陽光発電の理想的な利用法として、自然保護を考慮し、しかも安価でクリーンなエネルギーが必要不可欠と感じ、日本で開発されたペロブスカイト太陽電池の普及推進を、学校でも話題にしていきたいと語りました。

Social Gathering among Presenters



審査時間を利用して、当センタークワン・詠美職員が MC となり、参加高校生との交流会を行いました。まず、それぞれがテーマを選んだきっかけを話すことから始まりました。その後、本コンテスト司会学生 2 名との、英語版のゲームを楽しんだり、彼らが友人と日頃英語で話したりすることで英語力が向上した話に、発表者は興味津々に聞き入っていました。

Overall Comments Prof. Kevin Mcmanus



最後に、審査員を代表して、人間科学部ケビン・マクマナス准教授による総評がありました。発表者全員が、このプレゼンテーションに勇気をもってチャレンジしてくれたことへの賛辞、そして背中を押してくれた周囲の方々への謝辞が送られました。このコンテストを通して、急を要する SDGs の課題解決に向けて、SDGs の 17 のゴールに直接かわりを持って、家族や友人たちと考えを共有し、ともに活動することの大切さを理解する、大きな一歩となったと締めくくりました。

